

完了アスペクト記号素，不定詞記号素と 発話の他の部分の境界画定

—— 前置詞記号素 *après* と共起する場合 ——

川 島 浩 一 郎*

0. はじめに

表意単位とその実現形の間に，一対一対の対応はない。したがって発話の切片が表意単位の実現形であるのかそうでないのについては，その切片のかたちを決定的な論拠にすることはできない。どの切片が一つの表意単位の実現形であるのかを，かたちだけに依拠せずに，境界画定する基準が必要である。

(1) *Après avoir lu ce livre, je pris une décision : [...]*. (Eric-Emmanuel Schmitt, *La secte des Égoïstes*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p. 53)

(2) *Enfant, après avoir failli se noyer dans ce lac, elle avait développé une peur panique de mourir.* (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.195)

本稿では，(1) の *après avoir lu ce livre* や (2) の *après avoir failli se noyer ...* のような事例を題材にして，表意単位の実現形を境界画定する手法を検討する。(1) の *après avoir lu ce livre* や (2) の *après avoir failli se noyer ...*

* 福岡大学人文学部教授

のような連辞においては、前置詞記号素の実現形である *après* と完了アスペクトを標示する切片および不定詞の動詞形が共起する。結論を先取りして言えば、このタイプの連辞にあっては、完了アスペクトを標示する表意単位の実現形や不定詞記号素の実現形は、avoir lu や avoir failli のような動詞形の内部にのみ存在するわけではない。これらの実現形は動詞形の外部にもひろがり、その外部とつながっていると考えざるをえない。

1. 表意単位の実現形としての認定条件

1.1 表意単位と実現形の非一対一対応

表意単位とその実現形の間に、一対一対の対応はない。声の大きさ話す速さ、男女差、年齢差、地域差、個人差など、音声面でのあらゆる違いに着目することによって、同一の表意単位の実現形は無数に見いだすことができる。異音同義や同音異義の事例も少なくない。たとえば（３）の *paie* と（４）の *paye* のように、同一の表意単位が異なる実現形をもつことがある。また（５）の *pas* と（６）の *pas* のように、異なる表意単位が（音声的な微細な違いを除けば）同じ「かたち」で実現することも珍しいことではない。

（３）Je *paie* mes études moi-même. (Amélie Nothomb, *Antéchrista*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.27)

（４）Je *paye* le vin, [...]. (Philippe Djian, *37° 2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.205)

（５）Alors, un déporté fait un *pas* en avant, la main tremblante. (Marc Levy, *Les enfants de la liberté*, Collection Pocket, 2007, p.325)

（６）Ça ne fait *pas* une grande différence. (Andrea H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.314)

（７）Ce jour-à, quitte à saccager son budget, il décida de s'offrir un vrai

repas. (Thierry Jonquet, *Mon vieux*, Collection Points, 2004, p.28)

したがって発話の切片が表意単位の実現形であるのかそうでないのについては、その切片のかたちを決定的な論拠にすることはできない。表意単位とその実現形は、一対一に対応しないからである。たとえば（５）や（６）の *pas* が表意単位の実現形だからといって、（７）の *repas* の内部にある *pas* が表意単位の実現形であるということにはならない。

1.2. 表意単位の実現形であることの必要条件

発話の切片が表意単位の実現形であるためには、その切片が、少なくとも次の３条件をみたすことが必要である。条件（a）発話の一部分で、他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。条件（b）この入れ換えによってえられる発話が、統辞的に適格な発話である。条件（c）この入れ換えによって、発話の知的意味に弁別が生じる。知的意味という用語は、大略、言語共同体において共有される客観的、離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。たとえば（８）と（９）では *fiction* と *folie* を入れ換えることができる。つまり *fiction* と *folie* が条件（a）をみたす。（８）も（９）も統辞的に適格な発話である。つまり *fiction* と *folie* が条件（b）をみたす。また *fiction* と *folie* の入れ換えによって（８）や（９）の意味に客観的、離散的な弁別が生じる。つまり *fiction* と *folie* が条件（c）をみたす。したがって（８）の *fiction* と（９）の *folie* は、それぞれの文脈において、表意単位の実現形だと考えてよい。同様に（８）の *de la fiction* と（９）の *de la folie* を入れ換えることによって、発話の意味に客観的かつ離散的な弁別が生じる。（８）も（９）も統辞的に適格な発話である。よって（８）の *de la fiction* と（９）の *de la folie* は、それぞれの文脈において表意単位の実現形だとみなしてよい¹。

¹ 表意単位には、大きく分けて、最小の表意単位である記号素と、複数の記号素からなる連辞がある。

- (8) C'est *de la fiction* ! (Jean-Christophe Grangé, *La ligne noire*, Collection Le Livre de Poche, 2004, p.474)
- (9) C'est *de la folie* ! (Thierry Breton et Denis Beneich, *Softwar*, Collection Le Livre de Poche, 1984, p.285)
- (10) Je suis journaliste. (Jean-Christophe Grangé, *La ligne noire*, Collection Le Livre de Poche, 2004, p.295)
- (11) Je *ne* suis *pas* journaliste. (Thierry Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.157)

入れ換えの可能性が検証の対象となる切片には、いわゆる「ゼロ切片」も含まれる。ゼロ切片とは、切片が不在の状態を指す²。たとえば (10) にみられるように、(11) の *ne* および *pas* はゼロ切片と入れ換えることができる。また、この入れ換えによって (11) の知的意味に弁別が生じる。そして (10) と (11) はどちらも、統辞的に適格な発話である。この観察から (11) の *ne* および *pas* を、表意単位の実現形として認定することができる。

- (12) Elle sentit sa *main* trembler. (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.410)
- (13) Je rentre à Paris *demain* soir. (Fred Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.12)

発話の切片が表意単位の実現形であることについては、文脈ごとの個別の検証が必要である。ある文脈で表意単位の実現形である切片が、他の文脈においても表意単位の実現形であるとはかぎらない。たとえば (12) において *main* は表意単位の実現形である。これにたいして (13) の *demain* の内部にある *main* は、表意単位の実現形ではなく記号素（最小の表意単位）の実現形の

² ゼロ切片との入れ換えが知的意味の弁別をとまなわない事例には、言語単位が省略されている場合も含まれる。したがってゼロ切片との入れ換えによって言語単位が存在を検証するためには、それが省略ではないことが前提となっている必要がある。

部分にすぎない．表意単位の実現形であるのかそうでないのについては，かたちの異同は決定的な論拠にならない．表意単位とその実現形は，一対一に対応しないからである（1.1.を参照）．

(14) Dépêchons-nous ! (Roald Dahl, *Charlie et la chocolaterie*, Collection Folio Junior, 1964, p.110)

(15) Dépêchez-vous. (Fred Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.31)

ある切片が表意単位の実現形だとしても，その切片と他の切片との間に表意単位の実現形としての境界（切れ目）があるとはかぎらない．同一の表意単位の実現形は，複数の箇所に分散して現れることがある．たとえば（14）の *ons* は，それを表意単位の実現形であると考えてよい．しかし（14）において *ons* と *nous* の間に表意単位の実現形としての境界はない（1.4.を参照）．これらの *ons* と *nous* は同一の表意単位の実現形である．実際（15）にみられるように，*dépêchons-nous* の *ons* を *ez* と入れ換えれば *nous* もまた *vous* と（いわば自動的に連動して）入れ換わることになる．そこに表意単位の実現形としての境界（切れ目）がないからである．

1.3. 必要条件の必然性

次の3条件をみたさない発話の切片を，表意単位の実現形として明確に認定することはできない．条件（a）発話の一部分で，他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる．条件（b）この入れ換えによってえられる発話が，統辞的に適格な発話である．条件（c）この入れ換えによって，発話の知的意味に弁別が生じる．条件（a），条件（b），条件（c）の存在には，それぞれ必然性がある（1.2.を参照）．これらの条件に依拠しないかぎり，発話の任意の切片が表意単位の実現形であるのかそうでないのかを明確に判定する手段はない．

- (16) Je repars en France demain soir. (Guillaume Musso, *Sauve-moi*,
Collection Pocket, 2005, p.60)

発話の切片が表意単位の実現形であるためには、その切片と発話の他の部分との間に境界画定がなされる必要がある。条件 (a) をみたす切片は、発話の他の部分との間に境界がある可能性がある。条件 (a) をみたさない切片には、この可能性がない。条件 (a) に反して、かりに (16) の en も France も（ゼロ切片も含めて）他の切片との入れ換えができないと仮定しよう。この仮定は (16) の en と France が一体化して分離不可能であることを意味する。つまり en も France も、encre における en や cre がそうであるように、表意単位の実現形の全体ではなく、記号素（最小の表意単位）の実現形の一部分にすぎないことになる。

発話の切片が表意単位の実現形であるためには、その切片以外の発話の切片がすべて表意単位の実現形であることが必要である。条件 (b) をみたす切片には、その可能性がある。その切片の有無が、発話の他の切片が表意単位の実現形であることに影響を与えないからである。たとえば (16) において pars en France de をゼロ切片と入れ換えた結果、je re main soir をえたとしてみよう³。少なくとも、この je re main soir が統辞的に適格な発話でないかぎり、pars en France de が表意単位の実現形であることは保証されない。表意単位の実現形から表意単位の実現形を除去した残りの部分は、表意単位の実現形であるはずだからである。表意単位の実現形に表意単位の実現形以外のものを加えても、それが別の、より大きな表意単位の実現形になるわけではない。

発話の切片が表意単位の実現形であるためには、その切片が表意機能をになう必要がある。条件 (c) をみたす切片は、表意機能をになう可能性がある。条件 (c) をみたさない切片には、この可能性がない。条件 (c) に反し、かりに

³ 表意単位の実現形ではない切片をゼロ切片と入れ換えた結果、偶然に統辞的に適格な発話を与えることはありえる。

(16) の France を他の切片と入れ換えることはできるが，この入れ換えによって (16) の知的意味に弁別が生じないでしょう．この仮定のもとでの France を，表意単位の実現形と言うことはできない．どのような実現形を用いても（たとえば France であろうが Allemagne であろうが Espagne であろうが）発話の知的意味に弁別が生じない文脈があるとすれば，それは表意機能そのものが働きの文脈にほかならない．

1. 4. 表意単位の実現形としての境界画定

同一の発話中で共起する 2 切片（X，Y と記号化する）について，それらの間に表意単位の実現形としての境界（切れ目）があると言うためには，少なくとも次の 3 条件がみたされることが必要である．条件（d）X，Y の一方を維持したまま，他方を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる．条件（e）X と Y の入れ換えによってえられる発話が，統辞的に適格な発話である．条件（f）X と Y の入れ換えによって，発話の知的意味に弁別が生じる．たとえば (17) の *il panique* の *il* は *je panique* にみられるように，他の切片と入れ換えることができる．同じく (18) の *il grimace* にみられるように，*il panique* の *panique* は他の切片と入れ換えることができる．つまり条件（d）がみたされる．(17) の *il panique* や *je panique*，(18) の *il grimace* はいずれも，統辞的に適格な発話である．つまり条件（e）がみたされる．また，これらの入れ換えによって *il panique* という発話の知的意味に弁別が生じる．つまり条件（f）がみたされる．したがって (17) において *il panique* の *il* と *panique* の間には，表意単位の実現形としての境界があると考えてよい．

(17) *Il panique. Moi aussi, je panique.* (Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.125)

(18) *Il grimace.* (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.212)

X, Y の間に表意単位の実現形としての境界があると言えるのは、上記 3 条件がみたされた場合にかざられる。X, Y の間に表意単位の実現形としての境界があれば、X（あるいは X を含むより大きな切片）と Y（あるいは Y を含むより大きな切片）が両方とも、表意単位の実現形としての基準をみたすはずだからである。ようするに表意単位の実現形としての境界は、表意単位の実現形と隣接するはずである。たとえば il panique における il と panique の間に表意単位の実現形としての境界があると言えるのは、il と panique が両方とも表意単位の実現形だからにほかならない（1.2. を参照）。

(19) Il fallait bien. (Sébastien Japrisot, *Compartiment tueurs*, Collection Folio, 1962, p.163)

(20) Fallait bien. (Serge Brussolo, *La nuit du venin*, Vauvenargues, 2006, p.83)

X, Y のどちらか一方でも上記 3 条件をみたさなければ、X, Y の間に表意単位の実現形としての境界はないとみなしてよい。(19) の fallait は表意単位の実現形としての必要条件をみたす（1.2. を参照）。この fallait は、たとえば il chantait bien の chantait と入れ換えることによって発話の知的意味に弁別が生じる。一方 (19) の il は表意単位の実現形としての必要条件をみたさない。この il を他の切片と入れ換えることはできないからである。また (20) のようにゼロ切片と入れ換えたとしても、発話の知的意味に弁別が生じるわけではない。したがって (19) の il と fallait の間に表意単位の実現形としての境界はないことになる。(19) の il が表意単位の実現形ではないからである。

(21) Asseyez-vous, s'il vous plaît. (Maxime Chattam, *In tenebris*, Collection Pocket, 2002, p.226)

(22) Taisez-vous. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.359)

(23) Asseyons-nous. (Albert Camus, *Caligula* suivi de *Le malentendu*,

Collection Folio, 1958, p.121)

同一の発話中に共起する複数の切片 X, Y, Z において, X と Y の間に表意単位の実現形としての境界があるとしても, X (あるいは Y) と Z の間にも境界があるとはかぎらない. たとえば (21), (22), (23) はいずれも統辞的に適格な発話である. (21) において, assey と ez の間には表意単位の実現形としての境界があると考えてよい. (22) の taisez にみられるように, (21) の assey は tais と入れ換えることができる. (23) の assoyons にみられるように, (21) の ez は ons と入れ換えることができる. これらの入れ換えによって, 発話の知的意味には弁別が生じる. ただし (21) の ez と vous の間に, 表意単位の実現形としての境界はない. 実際 (21) と (23) にみられるように, ez を ons と入れ換えれば vous もまた nous と (いわば自動的に連動して) 入れ換わることになる. そこに表意単位の実現形としての境界 (切れ目) がないからである.

1.5. 表意単位の実現形としての間接的認定条件

発話の切片が表意単位の実現形であるためには, その切片が, 少なくとも次の3条件をみたすことが必要条件となる. 条件 (a) 発話の一部分で, 他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる. 条件 (b) この入れ換えによってえられる発話が, 統辞的に適格な発話である. 条件 (c) この入れ換えによって, 発話の知的意味に弁別が生じる. この3条件の存在には必然性がある (1.3. を参照).

表意単位の実現形の存在を, 上記3条件に直接的に依らずに, 間接的に推定する方法がある. ただし, この方法も上記3条件にもとづいていることにはかわりはない. 以下, この間接的な方法の一つを示す.

(24) Je peux *entrer* ? (Cécile Krug, *Demain matin si tout va bien*, Collection J'ai lu, 2004, p.140)

(25) Je peux *fumer* ? (Fred Vargas, *Dans les bois éternels*, Collection J'ai lu, 2006, p.176)

表意単位の実現形のなかに、より小さな表意単位の実現形が含まれていることがある。たとえば (24) と (25) はいずれも統辞的に適格な発話である。(24) の *entrer* と (25) の *fumer* を入れ換えることによって、(24) と (25) の知的意味に弁別が生じる。つまり *entrer* と *fumer* はどちらも表意単位の実現形である (1.2.を参照)。また *entrer* に含まれる *entr* と *fumer* に含まれる *fum* を入れ換えることによって (24) と (25) の知的意味に弁別が生じる。つまり *entr* と *fum* はいずれも、表意単位の実現形である。したがって (24) において表意単位の実現形である *entrer* には、*entr* という表意単位の実現形が含まれる。(25) において表意単位の実現形である *fumer* には、*fum* という表意単位の実現形が含まれる⁴。

このような場合、より大きな表意単位の実現形からより小さな表意単位の実現形を除去した残りの部分には、これらとは別の表意単位の実現形が含まれていると推定することができる。表意単位の実現形に表意単位の実現形でないものを加えても、それが別の表意単位の実現形になるわけではない (1.3.を参照)。よって (24) の *entrer* から *entr* を除去した残りの部分には、何らかの表意単位の実現形が含まれると推定してよい。同様に (25) の *fumer* から *fum* を除去した残りの部分には、何らかの表意単位の実現形が含まれると推定してよい。これらの実現形は、不定詞記号素の実現形と呼ばれる (2.2.を参照)。

⁴ 形態融合 (アマルガム) の事例においても、切片の入れ換えは同様に適用できる。

2. 前置詞記号素 *après* と共起する記号素の境界画定

2.1. 完了アスペクト記号素の実現形

複合過去の動詞形には，完了アスペクト記号素の実現形が含まれる．たとえば (26) と (27) は統辞的に適格な発話である．(26) の *ai cherchée* と (27) の *cherche* を比較すれば，後者にはない切片が前者にあることは明らかである．この切片は (26) の *ai cherchée* と (27) の *cherche* にみられるように，他の切片と入れ換えることができる．また，その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる．つまり表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.2. を参照)．したがって表意単位の実現形とみなしてよい．この切片は，完了アスペクト記号素の実現形と呼ばれる．事態の完了を標示する最小の切片だからである．

(26) Je t'*ai cherchée* partout. (Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.259)

(27) Je te *cherche* partout ! (Jean-Jacques Sempé & René Goscinny, *Le petit Nicolas*, Collection Folio, 1960, p.54)

(28) Je suis ravi d'*avoir fait* votre connaissance. (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.50)

(29) Je suis ravie de *faire* votre connaissance. (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.173)

いわゆる不定詞の動詞形に，完了アスペクト記号素の実現形が含まれることがある．たとえば (28) と (29) は，いずれも統辞的に適格な発話である．(28) の *avoir fait ...* と (29) の *faire ...* を比較すれば，後者にはない切片が前者にあることは明らかである．この切片は (28) の *avoir fait ...* と (29) の *faire ...* にみられるように，他の切片と入れ換えることができる．そして，その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる．つまり表意単位の実現形としての

必要条件をみたす (1.2.を参照)。したがって、表意単位の実現形であると考えてよい。この切片には完了アスペクト記号素の実現形が含まれると考えられる。(28) の avoir fait ...では、(29) の faire ...とは異なり、事態の完了が明示されているからである。

2.2. 不定詞記号素の実現形

いわゆる不定詞の動詞形には、動詞記号素の実現形が含まれる。たとえば (30) における *mange* と (31), (32), (33), (34) における *manger* には、同一の動詞記号素の実現形が含まれるはずである。そうでなければ、*mange* や *manger* を実現形とする表意単位の間には共通部分がないことになってしまう。不定詞と呼ばれる動詞形には、動詞記号素の実現形が含まれると考えざるをえない。

(30) Ici, on *mange* toute la journée. (*Elle*, 19 septembre 2005, p.84)

(31) *Manger* la rassure. (Serge Brussolo, *La fenêtre jaune*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.45)

(32) Tu m'emmènes *manger* quelque part ? (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.369)

(33) Mon père a commandé à *manger*. (Marc Levy, *Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, Collection Pocket, 2008, p.251)

(34) On a de quoi *manger* pendant longtemps ? (Maxime Chattam, *Le 5^e règne*, Collection Pocket, 2003, p.454)

いわゆる不定詞の動詞形には、動詞記号素ではない表意単位の実現形が含まれる。たとえば (31) や (32) において、*manger* を *mange* と入れ換えることはできない。よって *manger* と *mange* は統辞的なステイタスが異なると言ってもよい。つまり (31) や (32) の *manger* には、動詞記号素の統辞的ステイタスに変化を加えるような要素があることになる。したがって *manger* には、

mange には含まれていない表意単位の実現形が含まれていると考えざるをえない（1.5.を参照）。この表意単位は不定詞記号素と呼ばれる（1.5.を参照）。それが不定詞の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

以上より，いわゆる不定詞の動詞形は，動詞記号素の実現形と不定詞記号素の実現形を含む連辞であると考えざるをえない。たとえば（31）の manger という動詞形は，不定詞記号素の実現形と（30）の mange と共通の動詞記号素の実現形を含む連辞である⁵。不定詞記号素の実現形は，不定詞と呼ばれる動詞形とは別物であると言ってよい⁶。

2.3. 前置詞記号素 *après* との共起における不定詞記号素の実現形の境界画定

前置詞記号素 *après* の実現形と不定詞記号素の実現形が共起することがある。たとえば（35）の *avoir terminé mon quatrième roman* には，不定詞記号素の実現形が含まれる。この切片には，*j'ai terminé mon quatrième roman* には含まれない表意単位の実現形が含まれている。この実現形は，不定詞記号素の実現形と呼ばれる（1.5.と2.2.を参照）。それが不定詞の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

（35）*Après avoir terminé mon quatrième roman, je me suis rendu compte que je racontais toujours des histoires de types plaqués.* (Jean Echenoz, *Je m'en vais*, Minuit, 1999/2001, p.250)

（36）*La petite descend toujours vers les neuf heures, après avoir refait son lit.* (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.141)

しかし前置詞記号素 *après* の実現形と共起する不定詞記号素の実現形は，統

⁵ 動詞記号素と「不定詞記号素をともなう動詞記号素」の統辞的な相違については，川島（2007a）および川島（2007b）を参照。

⁶ 不定詞記号素は非動詞化記号素の一つである。この事実については，川島（2013a）および川島（2013b）を参照。

辞的な適格性を崩さずには、他の切片と入れ換えることができない。ゼロ切片との入れ換えも不可能である。たとえば (36) の avoir refait ... から、不定詞記号素の実現形を除去することはできない。(36) の avoir refait ... において不定詞記号素の実現形を他の切片と入れ換えれば、統辞的な適格性が失われてしまうことになる。

よって前置詞記号素 après の実現形との共起において、不定詞記号素の実現形と発話の他の部分の間に表意単位の実現形としての境界（切れ目）は存在しないことになる。表意単位の実現形としての境界が画定されるための必要条件がみたされないからである（1.4. を参照）。表意単位の実現形としての境界があるためには、少なくとも、当該の切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができないなければならない。

以上より、前置詞記号素 après の実現形と共起する不定詞記号素の実現形は動詞形の内部にあるだけではなく、不定詞の動詞形の外部にもひろがっていると考えざるをえない。動詞形の内部にある不定詞記号素の実現形には、発話の他の部分との境界が存在しないからである⁷。不定詞の動詞形の内部に現れる不定詞記号素の実現形は、不定詞記号素の実現形全体の一部分にすぎないことになる。

2.4. 前置詞記号素 après との共起における完了アスペクトの境界画定

完了アスペクトを標示する切片が、表意単位の実現形としての必要条件をみたすことがある。たとえば (37) と (38) はいずれも、統辞的に適格な発話である。(37) において完了アスペクトを標示する切片は、(38) にみられるように、ゼロ切片と入れ換えることができる。また、この入れ換えによって (37) と (38) の知的意味に弁別が生じる。したがって (37) において完了アスペク

⁷ 不定詞記号素の実現形が動詞形の外部にもひろがっていることについては、川島 (2012) も参照。

トを標示する切片は，表意単位の実現形の全体であると考えてよい（1.2.を参照）。この切片は，完了アスペクト記号素の実現形と呼ばれる（2.1.を参照）。それが完了アスペクトを標示するための最小の切片だからである。

(37) Je peux *m'être trompé*, [...]. (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, pp.350 – 351)

(38) Après tout, je peux *me tromper*. (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Terminus*, Collection Folio, 1980, p.58)

(39) *Après avoir examiné l'inconnu d'un œil un peu plus professionnel*, ils constatèrent qu'effectivement, [...], l'inconnu ne souffrait d'aucune blessure sérieuse. (Thierry Jonquet, *Mon vieux*, Collection Points, 2004, p.11)

(40) *Après avoir gagné le match*, Hugo, radieux, appela Sophie. (Alix Girod-de l'Ain, *De l'autre côté du lit*, Collection J'ai lu, 2003, p.126)

(41) Dans les tribus bantoues, il est de tradition de n'aborder les sujets importants qu'*après avoir longuement palabré de la migration des gnous*. (Alix Girod-de l'Ain, *De l'autre côté du lit*, Collection J'ai lu, 2003, p.134)

一方，前置詞記号素 *après* の実現形との共起においては，完了アスペクトを標示する切片が表意単位の実現形としての必要条件をみたさない。この切片は，統辞的な適格性を崩さずには，他の切片と入れ換えることができないからである（1.2.を参照）。ゼロ切片と入れ換えることもできない。たとえば（39）の *après avoir examiné ...*，（40）の *après avoir gagné ...*，（41）の *après avoir longuement palabré ...*において完了アスペクトを標示する切片を他の切片と入れ換えれば，そのことによって発話の統辞的な適格性が失われてしまう。

したがって前置詞記号素 *après* の実現形と共起して完了アスペクトを標示する切片は，発話の他の部分との間に表意単位の実現形としての境界（切れ目）

が存在しないことになる。表意単位の実現形としての境界が画定されるための必要条件がみたされないからである（1.4.を参照）。表意単位の実現形としての境界があるためには、少なくとも、当該の切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができないしなければならない。

以上より、完了アスペクトを標示する切片が前置詞記号素 *après* の実現形と共に起する場合、その表意単位の実現形は動詞形の内部にあるだけでなく、動詞形の外部にもつながっていると考えるをえない。このような動詞形の内部で完了アスペクトを標示している切片には、発話の他の部分との境界が存在しないからである。たとえば (39) の *après avoir examiné ...*, (40) の *après avoir gagné ...*, (41) の *après avoir longuement palabré ...* において完了アスペクトを標示する切片は、何らかの表意単位の実現形全体の一部分にすぎないことになる。

3. まとめ

同一の発話中で共起する2切片（X, Y と記号化する）について、それらの間に表意単位の実現形としての境界（切れ目）があると言うためには、少なくとも次の3条件がみたされることが必要である。条件 (i) X, Y の一方を維持したまま、他方を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。条件 (ii) X と Y の入れ換えによってえられる発話が、統辞的に適格な発話である。条件 (iii) X と Y の入れ換えによって、発話の知的意味に弁別が生じる。

(42) *Après avoir raccroché avec Erwan, j'appelai Martyn.* (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.455)

(43) *Après avoir fui les journalistes, elle s'était réfugiée chez Camelia pour y passer la nuit.* (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.148)

(42) の *après avoir raccroché ...* や (43) の *après avoir fui ...* にみられる前置詞記号素 *après* の実現形との共起において，不定詞の動詞形の内部にある不定詞記号素の実現形には，発話の他の部分との境界が存在しないと考えられる。他の切片との入れ換えができないからである。つまり表意単位の実現形としての境界が画定されるための必要条件がみたされない。

よって前置詞記号素 *après* の実現形との共起において，不定詞の動詞形の内部に現れる不定詞記号素の実現形は，動詞形の内部にあるだけでなく，不定詞の動詞形の外部にもひろがっていると考えざるをえない。不定詞の動詞形の内部に現れる不定詞記号素の実現形は，不定詞記号素の実現形全体の一部分にすぎないことになる。

(42) の *après avoir raccroché ...* や (43) の *après avoir fui ...* にみられる前置詞記号素 *après* の実現形との共起においては，完了アスペクトを標示する切片と発話の他の部分の間に表意単位の実現形としての境界（切れ目）は存在しない。この切片は，統辞的な適格性を崩さずには，他の切片と入れ換えることができない。つまり，表意単位の実現形としての境界が画定されるための必要条件がみたされない。表意単位の実現形としての境界があるためには，少なくとも，当該の切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができない。

したがって，完了アスペクトを標示する切片が前置詞記号素 *après* の実現形と共起する場合，当該の表意単位の実現形は動詞形の内部にあるだけでなく，動詞形の外部にもつながっていると考えざるをえない。前置詞記号素 *après* の実現形と共起する動詞形の内部で完了アスペクトを標示している切片には，発話の他の部分との境界が存在しないからである。たとえば (42) の *après avoir raccroché ...* や (43) の *après avoir fui ...* において完了アスペクトを標示する切片は，何らかの表意単位の実現形全体の一部分にすぎないことになる。

参考文献

- 川島浩一郎 (2007a) 「フランス語における動詞文と不定詞文について」『福岡大学人文論叢』38-4, 1281-1302.
- 川島浩一郎 (2007b) 「分布と統辞機能をめぐる一考察 —フランス語における動詞と不定詞—」『福岡大学研究部論集』A7-2, 119-132.
- 川島浩一郎 (2012) 「助動詞の定義と Pouvoir」『福岡大学研究部論集』A11-4, 39-48.
- 川島浩一郎 (2013a) 「動詞を非動詞化する記号素について — 現在分詞記号素, 過去分詞記号素, 不定詞記号素, ジェロンディフ記号素 —」『福岡大学人文論叢』44-4, 765-788.
- 川島浩一郎 (2013b) 「非動詞化記号素における対立」『ふらんぽー』38, 東京外国語大学フランス語研究室, 13-30.
- MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Paris, Didier.
- MARTINET, André (1985), *Syntaxe générale*, Paris, Armand Colin.